「USBメモリを初めて使う人」に挙手を求める平井先生。「使ったことがない人」と、自己否定につながる問いにはしない。

迷子にしない明確な導き

「前回は、朝クラブと理科教室の活動について、みんなでレポートの下書きをしましたね。今日は、その下書きを基にして、パソコンでまとめていきましょう」

中学部7組と8組、軽度の知的障害のある生徒たち11名がパソコンルームに集っている。本時、生活学習単元の指導にあたるのは、8組担任の平井先生と、TTで入る4人の先生方だ。

平井先生は、生徒を1人ずつ呼んで、前時に提出した下書きのシートと、USBメモリの箱とを手渡す。その際、それぞれにどんな内容のレポートをまとめるのか、本人への確認も兼ねて、みんなに紹介するように読み上げる平井先生。

「○○さんには、5月7日に、拡大鏡を使って、カブトムシの幼虫の観察をしましたというレポートを書いてもらいます」

「△△さんには、4月27日に、農場で、みかんの試食をしましたというレポートを書いてもらいます」

「◇◇さんには、5月11日に、ビオトープまでの道の草を、草刈り機で刈りましたというレポートを書いてもらいます」

シートを受け取った生徒たちは、あらためて自分が書いた内容を読み返し、今日すべきことを再認識しているようだ。

「間違ってない」ことの安心感

「USBってなーに?」

「箱、開けてもいいの?」

この日、初めて授業でUSBメモリを使う生徒たちは、早くも箱の中身に興味津々だ。平井先生が答える。

「今日は、パソコンで文字を打ち込んだり、写真を貼り付けたりしてレポートをまとめてもらいます。今配ったUSBメモリの中には、朝クラブや理科教室で、みんなや先生が撮った写真が入っています。それぞれ使いたい写真を選んで、レポートに貼り付けていってください。では、まずUSBメモリの使い方を説明します。みんなで一緒にやりましょう」

平井先生の「スイッチオン!」の掛け声でパソコンの電源を入れる生徒たち。平井先生はUSBメモリを挿す場所から丁寧に説明する。さらに、実際に生徒1人が作業しているデスクトップ画面をプロジェクターで映しながら、日付別に整理されている写真の探し方なども指導。生徒たちはスクリーンを見ながら、自分の操作が間違っていないか確認し、安心感を持って取り組んでいる。

繰り返しをいとわず理解につなげる

全員の理解が進んだところで、平井先生は「活動レポート」という『一太郎スマイル』の文書ファイルを開くよう指示。その文書には、あらかじめ氏名や日時、活動の内容、分かったこと、感想などを打ち込む枠や、写真を貼り付けるスペースなどが設けられている。

平井慎一先生

中学部8組担任。「特別支援教育では、目から入る情報が非常に重要です。ICTはそのための強力なアシスタント。さらなる分かりやすさを目指し、活用を進めていきたいと思います」

山口秀樹先生

総括主事兼中学部主事。「知的障害のある生徒らは、作業能力の進境著しい一方、コミュニケーション能力は不足しがち。働く力をはぐくむ中で、人とふれあう大切さを学んでほしいですね」

生徒のモニタをプロジェクターに映して説明する。同じ画面で確認できることが、他の生徒の安心感につながる。

京都府立舞鶴養護学校

開校5年目を迎えた舞鶴養護学校。小学部・中学部・高等部からなり、職業訓練棟や農場、ビオトープなど最新施設を備える。地域密着の高い専門性を持つ総合特別支援学校として、一人ひとりの教育的ニーズに応じたきめ細やかな教育活動を行っている。児童生徒数123名、室木義治(むろき・よしはる)校長。

〒624-0812 京都府舞鶴市字堀4-1
TEL:0773-78-3133
http://www.kyoto-be.ne.jp/maizuru-s/

実践事例レポート3

京都府立舞鶴養護学校

常に「自立」を見据えて自己肯定につながる学び

授業を豊かに、より分かりやすく変えるICT。その価値は、特別支援教育においてさらにパワフルに効力を増す。ICTが子どもたちにもたらす「自信」を「自立」へとつなぐ、舞鶴養護学校を取材した。

取材:西尾真澄・撮影:西尾琢郎

校長先生

Muroki Yoshiharu

室木義治校長先生

「本校の目指すところは、生徒の自立です。子どもたちが将来、豊かに生活していけるよう、一人ひとりの能力を最大限に伸ばして花開かせ、自信と技とを身に付けさせたいと考えています」

実践事例レポート3

ＴＴの先生方。一人ひとりの学習進度に合わせて、適切に支援の手を差しのべる。

ここで平井先生は、写真の貼り付け方を復習。生徒たちはすでに一度経験している作業とのことだが、全員の共通理解に落とし込むまで、平井先生は丁寧に授業を進めていく。

「だれが、どこで、なにを、どうしたのか。下書きを基にして、活動内容や分かったことなどを打ち込み、写真を貼り付けてレポートをまとめてください。まとめられたら印刷しましょう」

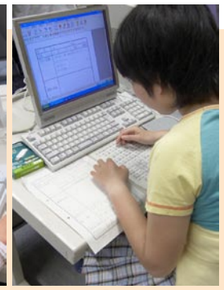
平井先生は、生徒たちの集中力を切らさないよう、今やるべきことを繰り返し繰り返し、そして少しずつ先へ先へと導いていく。キーボードに向かうみんなの表情は真剣そのもの。興味を見いだした彼らの集中力・潜在力はすさまじい。授業は3～4校時の2時間だが、休憩時間も忘れて無心にパソコンと向き合っている姿が印象的だ。

個々のスキルに応じて自立を促す支援

文字の入力ひとつ見ても、生徒たち一人ひとりのスキルには大きな差がある。ATOKスマイルのクリックパレットを使う子もいれば、キーボードをにらみながら、かな入力に挑む子もいる。ローマ字入力の表を見ながら、指一本で懸命にキーを叩く子もいれば、両手で軽やかにローマ字入力する子もいる。

また、ついついひらがなで確定してしまったものの、やっぱり頑張って漢字に変換してみようと、何度も入力・変換をし直している子や、下書きの文章をそのまま打ち込むのではなく、モニター上で推敲しながらまとめている子もいる。そうした個々人の学習進度の違いを、平井先生含む5人の先生方が適切に見極めてフォローし、励まし、支援している。

例えば、キーの配置が分からなくなるたびに先生を呼んでいた生徒に、ＴＴの先生は、「左手の薬指のあたりだね」「右の方にあるよ」「どこにあるかな？　頑張って探してみようか」と、その都度少しずつ難易度を高めていき、次第に生徒が自分の力でキーの配置を覚えるよう、粘り強さを持って指導にあたっていた。その甲斐あってか、その生徒は授業後半になると先生を呼ぶこともなくなり、自分の力でレポートを完成させるに至ったのだ。



文字入力の方法も十人十色。ATOKスマイルの「ローマ字対応表」を画面上に表示して確認する生徒あり、プリントされたローマ字対応表を手元に置く生徒あり。

受け身にさせない目標作り

生徒らの進捗状況を見ながら、記事をまとめ終えた子から順に印刷するよう、再度指示を徹底する平井先生。

「印刷できた人は、インターネットで、アゲハチョウの特徴や飼い方について調べてみましょう」

作業の早い生徒が手持ちぶさたになって授業への興味を失わないように、平井先生は一歩先へと目標を定める。次なる課題が見えていることにより、生徒らは迷うことなく印刷に入っていく。

パソコンから印刷指示を出した生徒は、素早くプリンタのもとへ。出力されたレポートを手にする生徒の表情が輝く。モニタの中だけでなく、手に触れられる形になった成果物は、それだけで生徒たちの学びのモチベーションにつながるのだ。

プリンタの周りに集う生徒たち。お互いにレポートを見せ合うことで、自然なコミュニケーションが生まれる。

アゲハチョウについて調べていた生徒は、早速面白いWebサイトを見つけたようで、そのページをプリントアウトしてもいいですかと先生に尋ねている。学習意欲の向上が、新たな学びにつながった瞬間だ。

ＴＴとの連携が柔軟性の高さを生む

「残り5分になりました。印刷が終わった人は、レポートを保存して、USBメモリと、下書きのシートと、印刷したものを前に提出してください。パソコンの電源も切りましょう」

生徒たちの様子を確認した平井先生がそう告げる。

「まだ自分のレポートができていない人も、レポートを保存して終わらせましょう。保存したら、USBメモリと下書きを持ってきてください」

すかさずＴＴの先生方が、まだ終わっていない生徒3人に寄り添い、保存作業をフォローする。

「パソコンの電源は切れましたか？　USBメモリが1つ足りないですね。まだの人、持ってきてください」

1つずつ確認しながら、授業を終える平井先生。起立した生徒たちの「ありがとうございました！」という声が、パソコンルームの外にまで元気に響く。

「生きる力」をはぐくむために

「生徒たち自身でこれまでの活動を振り返り、その成果と課題を文章としてまとめられる力を身に付けてほしいと思い、今日の指導案を作成しました」

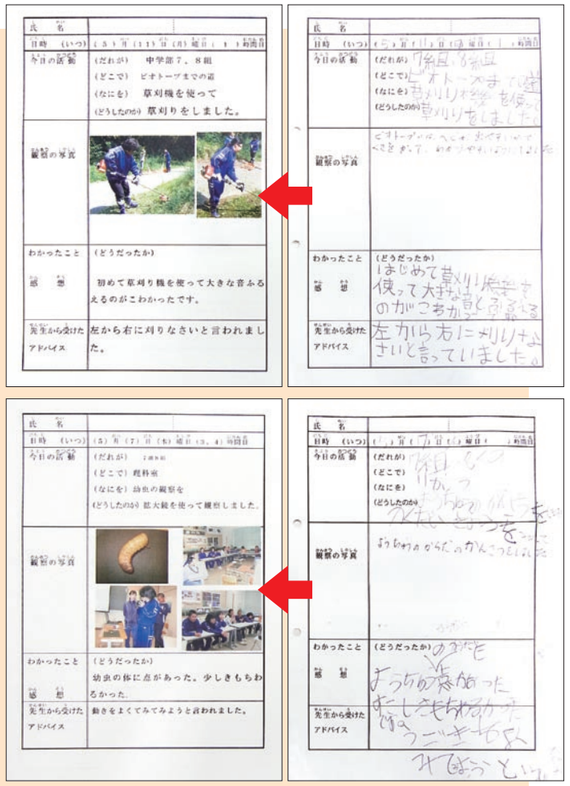
生徒たちが地に足を付け、しっかりと一歩一歩、確実に歩を進められるように。そのための振り返りだ。

今日の授業のねらいについて、平井先生は次のように語る。

「授業での目標は、朝クラブと理科教室の活動を題材にして、『一太郎スマイル』で文書を作成することでした。ねらいとしては、生徒たちに写真の貼り付け方や文章の書き方を身に付けさせることでしたが、印刷まで達しなかった生徒もいましたので、その点は今後、授業を進める上での課題としたいですね」

USBメモリなどの機器説明に少々手間取ったこともあり、平井先生の自己評価は厳しい。だが、生徒らの好奇心と集中力が素晴らしい成果物を生み出しており、平井先生のねらいは見事に結実している。

「生徒たちが、自ら考え、表現し、形にして残すこと。それが個々の自信につながります。今日の授業では、完成したレポートを2枚印刷するよう指示しました。1枚は掲示用、もう1枚は生徒が持ち帰って保護者に見せるためのものです。彼らの持つ豊かな創造力は、保護者の励ましも得て大きく花開き、彼ら自身の『生きる力』をはぐくむことにつながる。そう考えています」



下書きと完成したレポート。同じシートを使うことで、生徒たちは迷わず作業ができる。なお、舞鶴養護学校は本年度、SPP（サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト）に取り組んでおり、中学部7組と8組では、学級で行う毎週1回20分の朝クラブや、2週間に1回、昼休みに行われる全校の理科教室に参加している。

学校を企業に見立てて

「生産」から「販売」まで、作業学習の充実により進路実現を図る高等部。陶芸や木工、染色や織物、農園芸など、生徒が将来生かせる「技」の習得を目指すと共に、新たな製品開発やインターネットの活用など、時代に合わせた取組も盛んだ。

生徒たちが作った製品の数々。「作品」ではなく、あくまでも「製品」であることが重要だ。陶芸製品はインターネット販売も行われている。